

ぴったり心とことば

——生得的感性を呼び覚ます——

教材 「詩」(まどみちおなど)

中川 節子

1. はじめに

上原先生はことばについてこう語っています。

「子どもはことばを道具として使って生活しているんじゃないんです。このことばというのは「感覚と知覚」の問題で考えていかなければならないのです。……江戸時代からはつきり『感覚、目・耳・鼻・口、そして手足なんかで触れる、そういった活動が言語活動』だといわれています。外界と接触しているのがこれらの感覚なんです。そしてこれらの感覚は、決して万人平等ではないんですよ。儒学者達は、『心が操る。本体は心であり、それが働くから外界と交流できる。』と言っている。心が違うから感覚の受け取り方が違うし、そうならば口から出ることも当然違うわけです。

上原流の言い方言えば『心がものを見て

2. 指導案抜粋

(1) 日時 平成20年8月12日(火)

午前8時45分～10時15分

(2) 児童

静岡県伊豆の国市立大仁北小学校第4学年 亀山貴洋子学級 男子10名・女子10名 計20名

(3) 領域

感情・構え

(4) 授業テーマ

「ぴったり心とことば」

生得的感性を呼び覚ます

——まどみちおなどの詩を使って——

(5) テーマ設定の理由

① 姫路城を見て

「中は気むずかしかった。」

(3年男)

② 男女隣同士で1ヶ月並んで座っている

「もう！離婚したいよ。」

(4年男)

③ けんかのときに使うことばを書いてもらった。

「まっぴら、書いてやったぜ。」

と、原稿用紙を斜に構えて出す。

(3年男)

どれも中学年のスナップです。皆どの子もイメージが先行しています。①は、城のいか

めしい雰囲気を、②は、なれ合いになった雰囲気を、③は、けんかことばを書いたもので、それらしい構えで、その時にぴったりあったことばを使っています。どれも説明しようとしているわけではありませんが、このことばを発した時、聞いていた子どもたちが、皆その子ならではのことに笑い、わかるわかると、感覚に同意していたのを思い出します。イメージの世界、つまりその子が持つて生まれた感性（以下これを生得的感性と呼びます）が、呼び覚まされたといえるのではないかと思います。その子たちにとっては「ぴったり心とことば」の世界だったのではないのでしょうか。上原先生の言う「心とことばは一つ」ことばは伝達だけのために使われているのではないということです。特に子どもたちにとつてことばは心（生得的感性）の吐露であるはずだと思うのです。

今回授業する大仁北小の子どもたちは毎日富士山を眺めながら暮らしています。富士を見て育っている子どもたちが、五感を十分に生かし、どんな感性が発揮できるか楽しみです。児童態には、イメージ世界と現実世界を分母、分子に当てはめる考え方があります。（1・2年生は分母がイメージの世界・分子が現実世界で生き、3・4年生になるとこれが逆転し、母体となっている分母が現実世界となり、イメージ世界は分子となり、より現

實的に生きていくという考え方）転換期の4年生です。感覚が素直に流れず、知識に走ってしまうのではないかと、危惧するところもあります。自分たちの感覚を共有することで、それぞれのイメージの流れ方のくせを見届けることができるのではないかと思います。そして、何よりも、まどみちおなどの詩を使うことによって、子どもたちの生得的感性が呼び覚まされ、「ぴったり心とことば」の世界を楽しむことができるのではないかと、いう期待をもつて、このテーマを設定しました。

指導法としては、導入で、岸田衿子の「つくしんぼ」の詩を使い、この授業のねらいを示します。

次にまどみちおの詩を使い(一)と段階的に、「ぴったり心とことば」に迫ります。

(一)虫シリーズ

①「ケムシ」の詩を使い虫の名を考える。

②「ダンゴムシ」の題で詩を作る

(二)植物の実シリーズ

①「ヒョウタン」の詩を使い実を考える。

②「トウモロコシ」の題で詩を作る。

(三)体感シリーズ

しびれ・しつやり・くしゃみ。頭痛・ねんざ等の体感を伴う題で詩を作る。

どの段階でも必ず、「ぴったり心とことば」ということを念頭に入れ、書くように促します。

す。作ったものはそのつど発表し共有していきます。皆の「ぴったり心とことば」が、本当に生得的感性を呼び覚ましたものかどうかをその共鳴のしかたで確かめます。

3. 授業記録抜粋・考察

紙面の関係でポイントとなる児童の発言・やりとりのみの抜粋です。

※教師は実名を漢字で表記し、児童は仮名を平仮名で、特定できないところは○と表記しています。

※「↓」のあとに書かれているのは、そこまでのやりとりに関する補足や考察です。

〈展開1 導入〉

（「つくしんぼ」の詩を題名をかくして提示する。）

ひとさしゆびが
ちよつと
つばつけて
あつちでも
こつちでも
かぜのむき
しらべてる

瀬底 ここは野原なの。野原だよ。そして春です。冬が終わって春の風がふわぁーと吹いています。

(詩を読みながら人差し指を動かし情景を感じるように促す。「ちよつとやってみて、これだよ。」と子どもたちに指を立てるように話しながら、詩をもう一度読む。)

亀山 ここは春の野ですよ。さて、さて、なーんだ。

瀬底 当てられたらすごーい。

C 「たんぽぽ」「たんぽぽの種」

C 「つくし」(何名かが叫ぶ)

瀬底 つくし!そういうかんじ、ちよつと薄目にしてみたら、

C 「あー」「確かに」「ほんとうだ」

中川 つくしに見えてきた人

(多くの子どもが手を挙げ、「つくし」と叫ぶ。)

中川 ぴったしかんかん。つくしなんです。

C 「えっ、あたりなの?」

C 「えっ。」「すげえ」

中川 「つくしんぼう」「つくし」でもいいです。「つくし」これは「たんぽぽ」ではないよね。「つくし」としか、

C (すかさず) 言い方がない。

中川 「つくし」としか言い方がない。こんなふう「つくし」以外は考えられない。心とことばが、ぴったしかんかん。

きょうのお勉強は、この「ぴったり心とことば」です。
(と、ねらいを提示する。)

ぴったり心とことば

↓子どもたちも指を動かし、「つくし」の詩を聴いて、指が「つくし」に見えてきたのでしよう。見えてきた「つくし」に、他の何でもない「つくし」としか言い方がないと言わせたのだと思います。心の中に浮かんだものとことばが一致して、びっくりしたのだと思います。この感覚、これが感じられてはじめて「ぴったり心とことば」の入口となれたと思います。これで次の段階にいけると思いました。この導入は大事です。

〈展開2〉

虫シリーズ①「ケムシ」の詩を使って「つくし」と同様に詩を示し、何の虫のことを言っているのか、この詩にぴったりの虫を考え、発表する。(プリント使用)

さんぱつはきらい

中川 さあ、これは虫です。何でしょう。散髪ってわかるよね。髪の毛をちよきちよきと切るのが散髪です。それが嫌いなんだって。はい、これしかないっていうのをちよつと考えて

こう えーっ、わかんない。

C 毛が生えているんだよ。

なみ 毛が生えているものがわかんない。

てつ 毛が生えている虫?

「毛が生えている虫」と言ってくれた子がいたので、絵を描いてもよいと助言をする。子どもたち、プリントの横に短い棒の毛を描くが、猫になつてしまう子もいるし、毛虫に近い絵を描いているが、思い至っていない。そこで黒板に小林教諭が毛が生えている虫の絵を描く。子供たち熱心に見ている。)

こう ハリネズミ

中川 ハリネズミにも見えるね。でも虫でしよ。

C ああー。わかった。

(多数の子どもたちがプリントに自分の思う正解を書いていく。うなずき合う子も見られる。)

中川 書けたかな？（多くのこの手が挙がる）
あや 毛虫

中川 そうです。毛虫です。びったしかんかん。

（毛虫と書いた子15名。）

小林 みんなが一生懸命考えているのを見せてもらったんだけど、私が黒板に描いた絵を見て、「毛虫」と気付いた人もいるんだけど、私がこれを描かないのに、心でそれが見えた人がいる。今日の「びったり心とことば」っていうのはここに絵を描いてもらわなくても、自分の心の目で見える。そういうびったりなんだ。見えた？（何人かの子が手を挙げる。）そう見えたんだね。

小林 みかちゃんは、どういう絵が見えたのみか 毛虫だったら一杯毛が生えているから、毛を切るのが嫌いかなあと思った。

↓絵に手伝ってもらわなくても、心の目で見えてきたものを書くことを押さえてみました。

虫シリーズ② 「ダンゴムシ」

（「ダンゴムシ」の題名を提示し詩を書く。）

中川 今度のダンゴムシも、「あーっ」ってすぐ見つかからないように、こんなふうに「毛虫ーさんばつがきらい」を指して）考えてください。すぐわかつちゃうのはだ

め。ちよつとわかりにくいんだけど、これっきゃないよっていうのを考えて下さい。わかりにくいんだけど、よくよく考えるとダンゴムシだというのは考えて下さい。ダンゴムシは、こういうものですよっていう説明じゃなくてね。ちよつと難しいかな。

↓子どもたちは、一生懸命話を聞いてくれましたが、すんなりうなずく子と、うーんと考え込んでしまう子とさまざまでした。8割の子はびったりのことばを探していました。2割の子は考えたままでした。題名あてより難しいといっている子もいました。机間指導をしながら、先生たちとのやりとりで、びったりのことばを探せた子もいたようです。

（7分後・発表・そして友だちのびったり作品を選び挙手・数字は先生方を含めての数）

- | | |
|-----------------------|----|
| ◎ よろいをつけてるようかい（てつ） | 9人 |
| ◎ かたいからだにいっぱいある（さえ） | 0人 |
| ◎ 丸くなるとだんごみたいでこわがりのやつ | 1人 |
| （つか） | |
| ◎ 食べられないだんご（こう） | 9人 |
| ◎ まるくなるのがすき（ちえ） | 0人 |
| ◎ 虫についているに虫じゃない（たけ） | 5人 |

↓びったしかんかん賞（◎をつけたもの）には「よろいをつけてるようかい」と「食べられないだんご」が決まりました。「虫についているのに虫じゃない」は、理科的な興味を持つ子に人気でした。

〈展開3〉

植物の実シリーズ① ヒョウタン

（ヒョウタンの詩を提示し、何の実かを考え、発表する。）

なさけなや
おなかを
にぎりつぶされた

てつ （握りつぶすしぐさをする）

c 「わかりました。」

c 「あれしかないもの。」

c 「えー、わからない。」（さまざま）

中川 食べられない実です。

（「食べられない。」で「わかった！」の声がある。この段階で「ヒョウタン」と書いている子もいる。何も思い浮かべず机に伏せて考えている子もいる）

中川 はい、これが実です。（絵に書いた楕円形のものを示し、実際にまん中のところをつぶして見せる。子どもたち、「わかつ

た。」と握りつぶした絵を見て、気付く子も出てくる。)この真中をつぶしたんだよ。でも先生がつぶさなくても、こうやって実としてなっているよね。なーんだ？

まや ヒヨウタン

c いいです。(ほとんどの子。)

中川 ぴったしかんかん。ヒヨウタンになりました。ヒヨウタンで書いた人(8割くらいの子の手が挙がる)

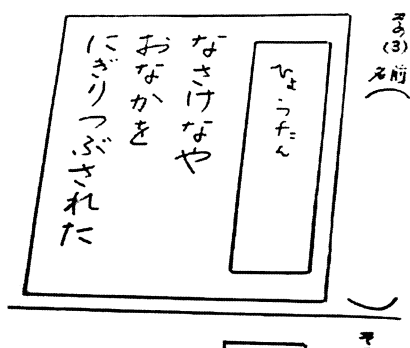


写真1 わかった ひょうたん

↓「ヒヨウタン」の場合は、実演しなくても食べられない、というところで4割くらいの子がわかっているのですが、多くの子に実感をしてわかってほしくて実演をしまし

た。あてものではなく、その詩のことばが、なるほどと心に浮かび、心が納得し、ひょうたんに至ってもらいたくて実演誘導しました。

植物の実シリーズ②「トウモロコシ」

(「トウモロコシ」の題を提示し詩を書く)

中川 まんまじゃだめだよ。「かんかん賞」になるように。

まや とつてきたときでもいいの？

中川 どっちでもいいんだよ。とつてきたあとでも、なっているときでも。これはどの時だよ。つて言ってくればいいよ。ヒヨウタンが「にぎりつぶされた」のところで、みんなひっかかっちゃったんだよ。だからみんなも、まんまはだめだよ。ちよつとひねつてみて下さい。皮をむいた後でもいいよ。

↓そのままの説明は詩にならないことを強調し、まんまでなく書くように促す。どの五感を使って、ぴったりと心とことばが一致していくのが楽しみです。

(子どもたち一人一人が黙々と書いている。自分の思いを言葉にしようとかんばっている。できた子から板書してもらう。どの子も

自分の作品を書いてもらいたくて、どんどん出てくる。考えたり作ったりする時間は、7分ぐらい。)

(発表・自分のぴったりに挙手(先生も含む))

◎子どもがたくさん(だい) 2名

◎バナナにアトビーできちゃった(みき) 8名

◎家族がいっぱいで全員日焼けしている(てつ) 3名

◎上手に食べないと歯と歯の間にはさまる(りか) 0名

◎たくさん黄色い歯がついている(たけ) 2名

◎もうふにつつまれた赤ちゃんみたい(まや) 5名

◎実がいっぱい。(なみ) 0名

◎緑色のもうふにつつまれて、あったかそうにねている。(さき) 6名

◎よろいのような葉をまとう。(けん) 1名

◎なっているとき緑のカモフラージュ(あや) 4名

中川 どの作品もいいね。(と読み上げながら全作品をほめる)
かんかん賞は(◎)



写真2 だんご虫～とうもろこし 板書

「バナナにアトピーできちゃった」と「もうふにつつまれ」と「緑の毛布につつまれた……」この2人合わせると「ぴったりかんかん賞」だね。

↓ダンゴムシの詩はどちらかというと視覚的なものが多いように思いました。トウモロコシで選ばれた作品は「アトピー。」も「もうふにつつまれて。」も、自分自身の体感としての皮膚感覚が浮かんできたように思えます。

〈展開4〉

体感シリーズ

(題名を提示し、体感を書く)

ねんざ・頭痛・
あくび・しびれ・
しゃっくり

中川 今度は体の中に出てくるそのものを書いてもらいたいと思います。体で感じること。そういうものを体感と言います。体に

感じることも、でもそのままではだめですよ。「ぴったり心とことば」これで書いて下さい。

(説明をしながら、用意した紙を配る。この中から選んで時間までいくつ書いても良いことを言う。鼻血やなみだ等自分で考え、書いている子もいた。)

↓子どもたちは楽しんで体感ぴったりのことばを探していました。悩んでいる子もいましたが、どの子も何をすればいいのかが分かり、がんばっている様子が見受けられました。

(ぴったりのことばを見つける時間10分位。画用紙に各自書き、黒板にはり、自分以外の人のぴったり賞にシールをはる。以下、子どもたちの作品。◎はかんかん賞)

しゃくり(6名)

○いきなり出てくる。くるしくなるときもある。出てしまったら、きりが無い。(ちか)
○ピク、もう止まれ。お水飲んだら止まった。よかった。(なみ)

○止まれ、止まれと思っても止まらない。(さき)

○だしたくないのに、ああ出てしまう。(あや)

○友達としゃべっているときなどはとてもじゃまなもの。(こう)

○したくないのに出てしまう。止めたくても止まらない。(たく)

しびれ(4名)

○ずっとすわっていたら、足にさわっても、いたくもかゆくもないけど、だんだんはりをさしたようにいたくなる。(ちか)

○すわってお話やっと終わった。ブルブル、もういやだ。(なみ)

○手足がピリピリうなっている。(さき)

○ねているときに動こうとしても、しびれて動けなくなる。(ひろ)

くしゃみ (3名)

○熱になると、よく出るバイキン (てつ)

○やっと出た。すっきりする。 (みま)

○でるとき、「は・は・は」と言ってしまう。 (たけ)

あくび (3名)

○口を大きくあけて、いっぱいいきが、
いっせいにでる。 (こう)

○あくびをすると、なみだが出る。 (みか)

○夜早くねないと、ねむいと大きく口をあける。 (くみ)

頭痛 (3名)

○ムキーとなつて、だれかにあたりたくなる。周りに静かにしてほしい。 (りか)

○頭の中で、ピシツとかみなり (けん)

○頭 ずきずき (だい)

なみだ (1名)

○かなしくなると…… (まや)

はなみず (1名)

○はなから出て、すっきりごくらく (てる)

はなぢ (1名)

○はながはれて、はなから赤いえのぐ (みき)

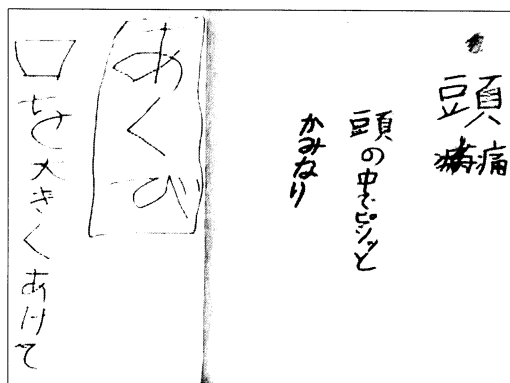


写真3 体感のこたば

(ぴったしかんかん賞、
頭痛—頭の中で、ピシツとかみなり
を発表し、授業終了。)

↓子どもたちが自分の感性を通してどんなことばを発するのか、探る授業でもあったし、同時に感覚を鍛える授業でもあったと思います。虫↓実↓体感と、進めていくことによって、感性を研ぎ澄ますことばが、説明より、ずっと心にびったりくるということが分かったのではないかと思います。体感には自分に身近故に、一段階上のような気がしますが、自分の感覚を楽しみながら詩を書いていた様子が伺え、これも大

きな収穫だったと思います。それでも尚、説明になってしまいう子もいましたが、その子たちも他の子ども「ぴったし心とことば」には共鳴し、わかるわかるの1票を投じていました。「ぴったし心とことば」感性を呼び覚ます一つの入口になった授業と確信しました。

5. おわりに

授業後の協議会の意見をあげたいと思います。

亀山 最後の体感のところ「しつやくり」で、「出したくないのに、出てしまう。」ではなく「出したくないのに、ああ、出てしまう。」って言える、そういうふうに見える子が出た来たんだって。とても感動しました。だからこういうことを何度も何度もやっていけば、生得的感性だけでなく言語感覚も磨かれていくのかなって。

武村 子どもと大人とシールを色分けすればよかったね。さつき亀山さんが「生得的感性だけでなく言語感覚も」って言ってたけれど、やっぱり生得的感性を刺激したからこそ出たんだと思う。そうでないと言葉の遊びになってしまう。言語感覚を磨くというのは技術じゃないんだね。やっぱりイメー

ジの問題。

瀬底 論理的なことも生得的感性で考えていく必要があるのね。

秦 体感のところでは自分の考えていることと、ことばの表現がなかなかびつたりこないようなところが感じられたのが、てるさんです。てるさんは「はなみず」と書いたままずっと「はなから出て」というところで止まって、「はなから出る水なんだよなあ。」って。でもそれじゃ駄目だって、でも最後は「はなから出てすっきりごくらく」って書いてすごい。

葛西 (本時の目標達成について) よかったと思います。ただ体感はやっぱり難しかったのかな。体感を託すものを見つけてくることが事物を指定されて体感を思いつくよりも難しい。……

自然の事物との感覚の交感というものがあって、それがもたになってことばになるんだって。外からあてがわれるものではなくて、自分の中にその感覚が生まれてくる。生まれてくるものももたになってことばになる。現代の人たちだけでなく昔の人たちともその感覚は共有できているのではないか。そこまで今回は考えていなかったんですけれども、心意伝承という中で、きょうの授業が考えられるのではないかと思います。……難波先生が「生得的感性」と

いうと生まれながらにして持っている感性ということになるんだけれども、そう考えると、このことばには「心意伝承」という概念が入ってこないのではないかと、夕べおっしゃったんですけれども、結果的に、今現在のことはただでなく長い時間の流れの中で子供の成長とことばというものが考えられているんだということを確認できたと思います。

長浜 「心とことばがびつたり」ということを子どもたちがずっと意識してやっていたのがよかったのだと思います。

小林 心とことばがびつたりした時にことばが身につくということだと思う。そのため

の国語教育だと思う。
瀬底 そのびつたりのことをどう表現すればびつたりなのかって追ひ求め続けることが人間なのかって。

亀山 それぞれの「びつたり」があるんだけれど、「これいいな。」っていうのをみんな

で共有できるじゃないですか。

瀬底 そういう「びつたり」っていうのは生きる喜びなのね。子どもを育てるっていうのは、そういう感覚を世代につながついていくっていう。人間って「びつたり」を持っているんだよ。ってことを伝えていくのが教育。……本当の意味でのコミュニケーションって、やっぱり「びつたり」なのよね。

難波 今日授業は「つくし」からは、すべて子どもにまかせた。すべて子どものままに動いた。だから子どもの感性が自由に動いた。児言態の授業で、子どもの感性は動くんだけど、目に見えない「こう動きましよう」的なものが働くのね。それはある意味では突破するために仕方のないことなんだけれど、今日は任せた。やっぱりこれだなあと。信じていいんだなあと。それから論理の話が出たんだけど、論理は感性とは対立しないものだと思うんです。人に論理を唱えて届くのはやっぱり感性が届くからだと思う。今日の授業で説明的にしか書けない子がいるでしょ。そういう子は何がしんどいかというと、分析的に語ることができない。それを教育することが我々の仕事だと思うのね。

(東京町田市立元小川小教諭)